A・コセアト『東プロイセン―歴史と神話』
（Andreas Kossert, Ostpreußen:
Geschichte und Mythos 2005 München）

三ツ木　道　夫

1．歴史家アンドレアス・コセアト

ドイツには数奇な運命をたどった辺境領土（Provinz）があった。中世期の1200年代、つまり近代の帝国主義による植民地政策のはるか以前、ドイツ騎士団による入植と先住民プルーセン人のキリスト教化に始まる東プロイセンである。この領土には、近代に入ると「ユンカー」と呼ばれる大規模地主が中枢をしめる「反動的社会」が形成され、さらにはナチスの受け皿ともなる政治風土が生まれた。第二次大戦中にはソ連侵攻作戦を立案した総統「大本営 Hauptquartier」が置かれるほどだったが、敗戦後は一転してドイツ系住民が追放される。騎士団の植民から追放まで750年の歴史である。この国土は、実質的には第二次世界大戦後、形式的にはポーランドとの国交正常化（1970年）によってドイツから永遠に失われてしまう。

爾来、歴史の専門的研究書、回顧譚はもとより、近年になっても女流ジャーナリスト、マリオン・G・デンホフの回想録、あるいは現代作家ジークフリート・レンツの創作集など、広い意味での文学と考えてよいものが数多く書かれている。書き手の多くはかつてのドイツ東端の地、東プロイセンを故郷とした人々である。

ところが近年、東プロイセンの風土を経験したことのない歴史家の東プロイセン研究が耳目を集めている。それは1970年生まれの歴史家、完全な戦後世代に属するアンドレアス・コセアト（Andreas Kossert）である。コセアト

『ＧＲ―同志社大学グローバル地域文化学会 紀要―』9, 2017, 101－113頁.
同志社大学グローバル地域文化学会 ©三ツ木道夫

はドイツ、スコットランドおよびポーランドで歴史、スラヴ研究および政治学を学んだ後、2000年にベルリン大学で博士号を取得する。その後ワルシャワのドイツ史研究所で研究を続けるが、2001年の著書『マズーレン―忘れられた東プロイセン南部 Masuren: Ostpreußens vergessener Süden 2001 Berlin』（Masurenとは現ポーランド北東部の、1000の湖沼が連なるといわれるマズーリ Mazury 地方を言う）を公刊し、大変な評判となる。他に、Damals in Ostpreußen（2008 München）、ベストセラーとなったKalte Heimat: die Geschichte der deutschen Vertriebenen nach 1945（2008 München）など、博士論文以来の継続的な研究テーマと思しき東プロイセンに関する著書がある。

『マズーレン』に続いて読者の注目を集めた大作は、本稿が扱う『東プロイセン―歴史と神話』（Ostpreußen: Geschichte und Mythos, 2005 München 以下『歴史と神話』と略記）である。この著作でコセアトは３年後にゲオルク・デヒオ賞（Georg Dehio Buchpreis）を受賞する。この文学賞はドイツの東部に位置する近隣諸国、つまり戦後に旧東プロイセン領を自国領土に組み込んだ国々との関係をテーマとした書籍に贈られるものだが、『歴史と神話』は東プロイセンの成立から没落、さらには敗戦後に周辺諸国へと分離・編入された旧領土の現状など、およそ450頁にわたる大冊となっている。

当然のことながら、自身の体験や思い出をもとに旧領土の文化が語られるわけではない。『歴史と神話』の特色のひとつは、なんといっても文学者、思想家の著作も東プロイセンを描き出す素材として用いられる点にある。東プロイセン由来の文学者たちが勢ぞろいしている。バロック時代の詩人、ジモン・ダッハから現代詩人のヨハネス・ボブロフスキーまでが登場する。ケーニヒスベルク（現ロシア領カリーニングラード）の哲学者カントはもとより、幻想作家ホフマン、親ナチの女流詩人と目されたアグネス・ミーゲル（Agnes Miegel）あるいはソ連の作家ソルジェニーツィンまで登場させながら、コセアトは東プロイセンの政治・経済も含めた「風土」を丹念に描きだしている。日本語で読めるプロイセンに関する書籍の数は少ないが、代表的な一般書S・ハフナー『プロイセンの歴史　伝説からの解放』（魚住昌良監訳、川口由紀子訳　2000年　東洋書林）にしても、政治史中心の記述であり、作家・思想家が取り上げられてもほとんど名前の列挙に終わっている。

コセアトは『歴史と神話』の中で「お化けのホフマン」こと、E.T.A.ホフマンの『世襲領』に言及するが、この中篇小説の冒頭には次のような風景描写がある（ホフマンもケーニヒスベルクの出身である）。

> バルト海の岸辺からほど遠からぬところにフォン・R…男爵家の先祖伝来のR城がある。この地方は荒涼としていて、底なしの流砂には草茎一本（Grashalm）生え出てこないという有様。ほかの地方なら貴族の館を飾る庭園のかわりに、裸の壁に沿って貧弱な赤松の林が陸地の奥へ連なっている。……鴉（Raben）のおぞましいガアガアいう声と迫りくる嵐を告げ知らせる鷗の甲高い叫び声だけが木霊（こだま）している。（ホフマン「世襲領」前川道介訳 『ドイツ・ロマン派全集』第13巻所収　国書刊行会　1989年　カッコ内筆者、訳文は一部変更した）

バルト海沿岸とは言われるものの、この風景はドイツのどこにあるのか、さらにホフマンの同時代人にはこの光景がどう映っていたのか、時代が下りドイツ帝国時代にはこの風土はどう受け止められたのか。そして現在はどんな光景となったのか。こうした作品の背景をなす「風土」について、これまでドイツ文学者は積極的に考えをめぐらせてきたのだろうか。

2.『東プロイセン―歴史と神話』の概略

まず『歴史と神話』の全体像を見ておきたい。コセアトの記述は大まかに言って、政治史、経済史、教会史（宗教史）の三分野の組み合わせからなっている。むろんそれらはすべて有機的に結びついている。以下章にあたるものに便宜的に番号を付して記す。カッコ内は各章を構成している節のタイトルである。

1 序章「東プロイセンは誰のものか Wem gehört Ostpreußen?」（ドイツの土地かユンカーの土地か、ポーランド、リトアニアそれともロシア？）
2「プロイセンはどこにあるのか Wo liegt Preußen?」（「ブルス」プルーセン

人とプロイセンの起源）

3「火と剣で Mit Feuer und Schwert?」（プロイセンにおけるドイツ騎士団、1410年の戦役）

4「新教の公爵領」（プロイセンでの宗教改革とヨーロッパ内での意義、公国内のリトアニア系・マズーリ系住民、＜サンクタ・ヴァルミナ＞聖なるエルムラント）

5「プロイセン人を懐柔せよ Careßirtet die Preußen」（ホーエンツォレルン家と反抗的プロイセン、S.ダッハと詩人サークル、身分制度・地主制度とタタール人との戦い）

6「辺境領土が王を作る Die Provinz macht den König」（1701年のフリードリヒ１世の即位、ペストの大流行、プロイセン的寛容・外国人と再入植、学校と教会、「格好の場」東プロイセンの精神史的遺産）

7「＜我らの死刑判決＞ Unser Todesurteil」（下降と希望）

8「改革期と反動 Reformzeit und Reaktion」（東プロイセンのリベラリズム、近代化の始まり）

9「ドイツ帝国のプロイセン州 Provinz im Deutschenreich」（東プロイセンの新たな開花、東プロイセンの多民族的な世界、終わりの始まり：ゲルマン化政策、旧教県エルムラントの文化闘争、クール人）

10「ヒンデンブルク、東プロイセンの救済者 Hindenburg, der Retter Ostpreußens」（戦火にまみれたドイツの州、タンネンベルク）

11「神話が国民に浸透する Ein Mythos und seine nationale Weihe」（州民投票とメーメル問題、「帝国」からの分離、政治的な急進化）

12「鉤十字の旗の下 Unterm Hakenkreuz」（東方州の守護者、いっそう過酷なゲルマン化、故郷喪失とユダヤ人殺害、「我らフォーゲルフライ」テロと抵抗運動、嘘のように静かな戦時下の日常、沈黙と圧迫、東プロイセンの収容所、ザムラントの大虐殺、「大脱出（エクソダス）」）

13「遺産はひとつ、分割は三者で Ein Erbe- dreigeteilt」（戦利品・ケーニヒスベルク、「ポーランドの同胞」、メーメルラントの「土着民」）

14「＜小暗き森の続く国＞ Land der dunklen Wälder」（連邦共和国における東プロイセンの遺産、民主共和国における遺産）

15「再発見のための最終弁論 Plädoyer für eine Wiederentdeckung」

3.「ドイツ帝国のプロイセン州」

いずれの章もそれぞれ興味深い記述に富んでいるが、先に言及した作家ホフマンとの関連から、九番目の章「ドイツ帝国のプロイセン州 Provinz im Deutschenreich」に着目したい。小説の舞台となった土地の特色が記述されているからである。

コセアトが冒頭で掲げるのは、最初の東プロイセンの歌、「わが故郷 mein Heimatland」(Johannna Ambrosius 作)である。この歌では確かに家郷が歌われてはいるのだが、この地には誇りかな山岳地帯、緑なす葡萄の木々、棕櫚の樹はないと歌われる。歌われるのは、我々にも馴染み深いアルプス山地、ライン・モーゼル河丘の葡萄畑ではない。メーメル河の岸辺が描かれ、特産の琥珀が「先史時代の澄んだ涙」と歌われ、ついで「馬」(特産の軽馬 Trakehner 種)、樅林の夜、樫の木々、あるいは浮砂の丘、鷗の飛び交う空が歌われる。

1871年のドイツ帝国建設と東プロイセンとの関係に始まり、かつてはこの地に存在した多民族的な世界の衰微、その原因であるゲルマン化政策、旧教県エルムラントの抵抗、奇観クール砂州(Kurische Nehrung、現在はロシアおよびリトアニア領のクルシェー砂州として世界遺産に登録)の住民文化までが記述される。コセアトが用いる資料は、政治・経済史はもとより、教会史、民俗学、言語学など多岐に渉るため、ここでは『歴史と神話』の縮約版ともみなせる『東プロイセン―かつて存在した風土の歴史』(Ostpreußen Geschichte einer historischen Landschaft, 2014 München)も参照したい。この縮約版には同じく「ドイツ帝国のプロイセン州」と銘打たれた短い章があり、歴史資料が省かれた分だけ、コセアトの記述原理が理解しやすいものとなっているためである。

コセアトはまずこの東プロイセンという州が、中心都市ケーニヒスベルクとカトリック県のエルムラントを除いては、徹底的に保守派の土地であった

ことを示す。ビスマルクの「社会主義者鎮圧法」が解除されたのち、1912年の国政選挙でドイツ社会民主党（SPD）は帝国全体で３割強の得票率を得る。しかし東プロイセンではその半分以下の得票にとどまっている。その５年前の国会選挙では州に割り振られた17議席中の13を保守党が占めるほど保守派の強い土地柄だった。これは東プロイセンの側からすれば、（悪しき）「時代精神 Zeitgeist」である社会民主主義から自分を守った結果に過ぎない。

むろん帝国に編入されると、この辺境でも鉄道網が整備され経済的にも興隆する。たとえば、メーメル河畔の都市ティルジットの南東、ザムラント県の東寄りにあった人口125人の町は、東部鉄道の開通によって15年もたたないうちに人口が3000以上増えてしまう。1923年には人口一万を超え、市に昇格し、ついにはベルリン並みの近代的駅舎を構えるにいたる。しかし州全体の人口は増えていかない。農業中心の経済構造が支配的であり、農地を相続できない住民はみな農村離脱者となり、ドイツの西部に逆移住していくことになったためである。

また鉄路の整備はドイツ西部の市民階級に家族旅行の愉しみを教え、当時のドイツ東端に位置するザムラントやクール砂州、周辺の海水浴場などが格好の旅先となった。ことに帝国内でありながら異国情緒を味わうことができるクール砂州には芸術家のコロニーが形成された。美術家の次には文学者が夏の別荘を構える。後のノーベル賞作家トーマス・マンもそのひとりである。

だがこうした新時代の幕開けは、同時に東プロイセン独自の文化風土が失われていくことの始まりでもあった、とコセアトは言う。この土地の文化風土の独自さは、ドイツ語系の、ポーランド語系マズーリ方言の、そしてリトアニア語系の言語文化の混合（Melange）によって生み出されていた。だが1873年、低学年の宗教の時間を除いて教育の場ではドイツ語だけを用いよ、という州総督ホルン（Oberpräsident Karl Wilhelm Georg von Horn）の布告がなされる。この布告に始まる帝国のゲルマン化政策によって、次第に東プロイセンの独特な「民族構成 ethnische Komposition」が失われてしまったのだった。この構成そのものが「東プロイセンの文化的な豊かさ」の源だったとコセアトは見ている。つまり帝国の一部になったことで、保守的な政治風土は

そのまま残り、インフラの整備による経済的な興隆はあったものの、多文化が共存する豊かさは失われたのである。

4.「東プロイセンの多民族的な世界」

ここで『歴史と神話』第九章第二節「東プロイセンの多民族的（multiethnisch）な世界」を紹介しておきたい。言語面から考えた場合、コセアトの考える「構成」の特質がよく看て取れるためである。

かつて「小リトアニア Preußisch Litauen」（メーメル河の両側で、クール潟湖に面している地域）では、ドイツの施政下でも「ブリシュカイ」と呼ばれるリトアニア方言が話されていた。しかしメーメル地域のプレークルス教区の記録を見ると、この方言とドイツ語が交じり合っていたことがわかるとされる。コセアトは12個ほどの日常語の対照表を掲げている。ドイツ語―ブリシュカイ―リトアニア語を並べた興味深い表である。たとえばドイツ語の机（Tisch）はブリシュカイではStals、リトアニア語でStalasと呼ばれリトアニア語形が優勢だが、新聞（Zeitung）となるとドイツ語形が優勢になる。リトアニア語ではLaikrastisと言うところをブリシュカイでは新聞をZeitungaと呼んでいたのだ。また「小リトアニア」のピルカレン郡では1900年当時、すでにリトアニア語は用いられていなかったが、リトアニア由来の「Talkas」とよばれる農業相互扶助のシステムは機能していた。さらにプルーセン人時代の言葉が20世紀の前半まで用いられていたという。それは「Kriwul」という村の集会を意味する単語で、Kriwuleとは「牧杖 Krummstab」のことだが、プルーセン人時代には祭司長（Kriwe）からこの杖の持ち手が遣わされた証しとなった。集会を開く場合にはこのKriwuleが家から家へと運ばれ集会のあることが理解されたといわれる。

コセアトはさらに例を挙げる。ダルケン郡の村の「年代記」にある耕牧地名はほとんどリトアニア語に由来し、河川の状態を示す語にもリトアニア語が用いられていた。その中にはリトアニア語とドイツ語を組み合わせたものさえあったという。たとえば「kleine Wingis」と表現される土地がある。こ

の表現の前半はれっきとしたドイツ語で「kleine 小さな」、後半はリトアニア語のvingisに由来する「湾曲」、つまりこの２語は河の「小さな蛇行部分」を指しているのだった。あるいは大きな窪地は、ドイツ語の「大きな groß」とリトアニア語の「窪み Lenkis」の縮小形に由来する「Lenkutt」を組み合わせて、「Große Lenkutt」と表現されていた。コセアトはこのような単語の並置は、この土地では二つの言語が対等に、横並びで使われていたことを示唆するものであり、リトアニア語話者がいなくなっても、「年代記」にはリトアニア語風の言い回しが多く見られるという。

またコセアトは新教の教区史資料を手がかりに、かつてはドイツ語、リトアニア語、ポーランド語の三言語が使われたダルケーネンやゴルダプ地区で、リトアニア系、ポーランド系の住民が目に見えて減少していったという。これはしかし教会の計算の仕方に関係がある。信徒それぞれの出自よりも使用言語に重きをおいた計算結果なのかもしれない。つまり民族的にはリトアニア系であっても、ドイツ語やその習慣に馴染み、ドイツ語の礼拝に参加し、ドイツ語で祝福を授けられた者は教会からみなドイツ人とみなされていたのだった。

リトアニア語はそれでも年を追うごとに衰退していく。東プロイセン全体で見ると1907年には69の教会でリトアニア語の説教が行われたが、1919年にはメーメル河の南岸ではわずかに７教会、1933年を過ぎると２教会だけとなっていく。公的な場ではリトアニア語は用いられず、わずかに新教の教会でリトアニア語が聞かれるだけとなった。

むろん小リトアニアにせよポーランド系のマズーリにせよ、それぞれの言語の衰退に対抗する運動はあった。おもに新教系の「祈りの結社 Gebetverein」がこの役目を果たそうとしたのだが、この運動の高まりは前述した州総督ホルンの布告と重なってしまう。この布告はゲルマン化政策の始まりであり、他方では多言語プロイセンの終焉を告げるものとなった。

マズーリの「祈りの結社」であるGromadkiの主張は、プロイセンの思想的遺産でもあるルター派の考えに忠実なものだった。それぞれの母語による福音の告知は大事なものであり、守られねばならない。よい子供を育てるには、彼らに母語で福音を伝えなければならない。だが国家も教会の役職者も

マズーリ人には母語への神聖な権利を認めようとしなかった。彼らは、コセアトによれば、ゲルマン化政策全般を拒んだのではなく、単に福音告知の聖なる言語であるポーランド語が重要なだけだった。

ドイツ帝国が成立する以前、ゲルマン化政策が開始される前には、プルーセン人時代の記憶をとどめた言語や民俗があり、ドイツ語、リトアニア語、ポーランド語が同等の権利で用いられた世界があったことになる。この世界を見失わないようにすること、それがコセアトの歴史記述の原理、つまりさまざまな歴史資料を援用する際の原則なのだといってよい。

5．クール砂州

第九章の最終節は「クール人」と題されるが、コセアトの記述はクール砂州の神話に始まる。神話の語るところでは、太古の昔、この砂州は存在せずメーメル河はそのままバルト海に注ぎ込んでいた。そのため漁民は九つの頭を持つ竜（海と風の神）に難儀させられることが多かった。これを憐れんだ女神、巨人のネリンガ（Neringa）は全長100キロに近い砂州を作り、バルト海の猛威から漁民を守ることにした。砂州の内側に、小舟でも安全に漁のできるクール潟湖が生み出されたのだった。

しかし現実の砂州は砂漠同然であり、浮砂が村や農地、墓所を覆い尽くしてしまうこともあった。コセアトは1776年この砂州に生を受けた詩人の悲しげな歌を引用している。「この地は浮砂の山に覆われる／山は丈高い樫の梢も圧しひしいだのだった／父祖伝来の墓所は荒涼の岸辺となった／収穫の鎌音はどこに／この地で聞こえていた歌声はどこへ行ったのか……」（Ludwig Rhesa 作）。1878年の時点でもこの状況は変わらない。当時この砂州を旅したLouis Passargeは砂に埋もれた教会と村を見つけ、「メソポタミアの廃墟パルミラ遺跡、あるいは灰に埋まったポンペイと変わるところがない……」と語るのである。

この地に住んでいたのは「クール人」とよばれた人々で、プルーセン人の子孫と考えられてきた。使われた言語はバルト海地方のラトビア語方言、

クール語だった。1684年の報告では「クール潟湖の名前はクールラントから来ている。そうでなければ北へ行くとクールラントに通じるためにクール潟湖と名づけられた。あるいはこの潟湖の住民の大部分がクール語を使っているからそう呼ばれたのだ」。

コセアトによれば、実際この地に住み付いたクール人とは、移住してきたラトビア人であり、彼らの故地はリーガ湾のクールラントだった。クール語の起源という観点で興味深いのは19世紀後半のラトビア人の動向である。ラトビア人がクール砂州で用いられる言語に興味を持ち研究に乗り出す。ラトビア人は自分たちが砂州の住民と何の問題もなく理解し合えることに驚く。クール人のほうはラトビアから来たお客さんが「クール語」を話しているものと確信していた。これを見ていた砂州中央の町ニッデンの住民は「あんたらはみな我々とおなじクール人なんだ」と言った、といわれている。

むろん言語学的には砂州のクール語は独立したバルト語であり、その歴史上の起源（つまりラトビア語）とは無関係に、ドイツ語、リトアニア語という近接言語との密接な接触によって発展してきたものとコセアトは言う。

6．歴史と文学

ホフマン『世襲領』の舞台は、実はこのクール砂州なのである。この土地を「草茎一本（Grashalm）も生え出てこない」とホフマンの語り手は述べるのだが、ほぼ同じ台詞を政治家にして言語学者のW.v.フンボルトも漏らしている。妻に砂州の奇観を知らせる手紙である。「荒涼極まりない砂丘、ひどく恐ろしげで悲哀に満ちた松の林……浮砂からは草茎の一本も伸びてはいない……」。

さらにホフマンの物語は、コセアトの説明に合致していく。世襲領の所有者R男爵一族の本拠はがんらいクールラントにあったのだが、占星術に魅せられた偏屈者が当主となるに及んで、この辺鄙な砂州の館に移り住んだのだった。現実の漁民たちがクールラントから砂州に移り住んだのと同じく、小説の中のR男爵家もクールラントからこの砂州にやって来ていたのであ

る。クールラントはたしかにかつて存在したバルト海沿岸のドイツ人の入植地であり、バルト・ドイツ人が治める国家（公国）だった。ホフマンに近い時代から例を挙げるなら、哲学者イマヌエル・カントの実弟が牧師として住まいした土地でもあった。

この物語にはやはりお定まりの若者が登場する。何の躊躇いもなく女性に逆上せ上がってしまう青年であり、この小説ではR館の若き男爵夫人ゼラフィーネに夢中になる。夫人は館に居つく風変わりな老姉妹に「澄んだ響きのクールラント方言」で話しかけ、ドイツの単語はその中に「ほんのすこし」混じる程度なのだった。

> あいかわらず奇怪な衣装とフォンタンジェ式髪飾りをつけた二人の老嬢が夫人の横をちょこちょこ歩きながら歓迎の言葉をフランス語でペチャクチャ喋っていた。夫人はその間なんとも言えないほどやさしい目差しで部屋の様子を見渡し、老嬢たちに交互にしとやかにうなずき、澄んだ響きのクールラント方言にほんのすこしドイツ語を交えて答えていたが、その声は音楽のように美しかった。（前川道介訳　282頁以下　訳文は一部変更）

さらに音楽好きのこの青年は夫人の歌う「短かなクールラント民謡」に聞きほれる。物語の語り手は有名なスペイン歌曲の内容をドイツ語で再現してくれるが、夫人のクールラント民謡も同じようにドイツ語で説明される。ともに元の歌詞は掲げられてはいない。

> 夫人の歌った短かな民謡（Liedlein）にしても、最近、結婚式で恋人と踊った。そのとき髪から飾りの花が落ちた。それをひろってくれた恋人が、どうだい、ぼくたちも結婚しないか、といった内容のものだった。（前川道介訳　292頁）

むろんフィクションではあるが、物語の語り手も青年もクールラント方言を理解しているわけである。ドイツの単語はほんのすこし混じる程度の方言

が理解されていたことになる。コセアトの説明からすれば、クール砂州で用いられたクール語とは、ホフマンのクールラント方言とほぼ同じもの、ドイツ語やリトアニア語との接触で独自に発展した言語と考えていいことになる。

ホフマンの時代には未だドイツ帝国は作られていない。東プロイセンを領土としたプロイセン王国があるだけである。つまり鉄道網が整備されない代わりに「ゲルマン化政策」も行われていない。多言語・多民族的な世界が東プロイセン内部には存在していたはずである。小説の中のクールラント方言に関するわずかな表現だけでは十分とはいえないが、ホフマンの物語はかつて在った世界をたしかに記録していたと言えるだろう。さらに当時の読者にはこの世界の存在は荒唐無稽な絵空事ではなかったのだ。

コセアトのいう豊かな世界が存在していたこと、それは文学作品を通じても垣間見ることができるのだ。文学作品のなかには、消えてしまった過去を再構成する素材が残されているのかもしれない。問題は再構成するための視点をどこに置くかなのだ。そもそもユンカーが支配する保守的辺境だったから、あるいは元来ドイツ人の住むべきではない場所に植民した結果、生じた領土だったのだから、敗戦後に東プロイセンが消滅したのは当然だと考えることもできる。しかしそのような視点からは、おそらく「多民族的な世界」の豊かさは再構成できない。むしろ東プロイセンで流行した「郷土文学 Heimatliteratur」の反近代性に目が向いてしまうだけかもしれないのだ。

最後になぜコセアトにはこのような歴史（ゲシ）・物語（ヒテ）が可能だったのかを考えてみたい。『歴史と神話』ではナチ時代の東プロイセン、敗戦後の様子、ことに悲惨な東プロイセン住民追放を描いた後に、分割された旧領土の現状が描かれている。コセアトの現状分析によれば、追放された旧住民のノスタルジーとは無関係にかつての史跡の回復が行われている。戦後に東プロイセンを占拠し分割した、いわゆる戦勝国側も、ドイツ騎士団の植民以来積み上げられた風土の記憶をすべて悪として拭い去ったわけではなかったのだ。ここまで記述してなお、コセアトが結びの一言として引用するのは、はるか昔の東プロイセン人、カントの言葉である。それは「永遠平和のために」と題された小品中の目立たない言葉である。

ところで人間はもともとだれひとりとして、地上のある場所にいることについて、他人よりも多くの権利を所有しているわけではない。（カント『永遠平和のために』宇都宮芳明訳　岩波文庫　1986年　48頁）。

コセアトは東プロイセンの歴史のなかのある時期に、多言語・多文化の共生が可能だったことを描き出した。過去の例を見れば、単一の言語、単一の民族がひとつの土地のうえに優先的に存在することだけが正しいわけでなかったのだ。過去に可能だったことは現代にあっても、やはり可能かもしれない。現代のドイツではトルコ人をはじめとする外国人労働者の受け入れ、その家族の定住によってドイツ社会から遊離した別種の「平行社会」が生じつつある。そうした移民をドイツ社会に統合することがドイツ喫緊の課題と考えられてきた。難民や移民のさらなる流入にドイツ社会が当惑しているのなら、かつて可能だった世界を再構成して見せたコセアトの仕事も、カントの言葉同様、希望の証しとなる。コセアトは未来を構成するために、現代から遠く隔たった東プロイセンという過去素材を用いたとはいえないだろうか。東プロイセンはドイツ人にとって異郷でもあり懐かしい土地でもある。やはりノスタルジーをかき立てる過去なのだ。比喩的に語るなら、過去を美化するのではなく、未来を構成するノスタルジーこそコセアトの優れた方法なのだといえる。文学作品や思想家の著作も、また言語資料も、政治・経済の歴史資料に劣らぬ構成素材となりうる。コセアトの仕事はそれを示しているように思える。